

ハウスキュウリの萎ちよう枯死症状と対策について

高橋英生・川越 仁・白木巳歳

(宮崎県総合農業試験場)

TAKAHASHI, H., KAWAGOE, H. and SHIRAKI, M.

Preventive Measures to Wilting Symptoms of Cucurberer
Plants Growing in Plastic House.

順調な生育をしてきたキュウリが、収穫期に入って以後、急激な萎ちようを起こす症状があり、現地試験を実施中の火山灰畑のハウス抑制キュウリ（品種“久留米落合H型”、は種9月12日、摘心栽培、接木区の台木は*C. ficifolia*）での発生について調査した。

調査ほ場でのこの症状の発生は1974年には11月中～下旬に、1975年は12月上～中旬に、収穫期に入って以後曇雨天がつづいたのちに発生し、その後の晴天によって激しいしおれと日やけが起こった。

これらの症状発生後も曇雨天の続いた1974年は回復することなく、ほとんどの株が枯死したが、1975年は天候が回復して、晴天が続いてからは、しおれの進行が止まり、枯死を免れた株は日焼け葉をもったまま回復した。この障害株の葉は一般的なしおれ→日焼けという経過をたどり、病原菌による枯死葉とは判定されなかった。なお萎ちよう後は根の傷みが急速に進むが、発生の初期段階は根の黄変、褐変など明らかな異常は認められなかった。

萎ちようの発生は自根の各区に多く、接木キュウリでは発生が極めて少なく、まれに発生している株は自根が切断されていない株であった。

また、萎ちよう株の調査の結果、萎ちよう株では摘葉後の葉柄が腐敗軟化していることが明らかにされ、萎ちようがないか、軽かった区ではこの葉柄の軟腐が明らかに少なかった。摘葉後の葉柄は健全な場合は、緑→黄→褐色と日数をかけて腐ってくるが、被害株では、摘葉後、葉柄が2～3日で暗緑色のまま腐敗軟化して下垂する。この軟腐を起こした葉柄からは、バレイシヨスライスを腐敗させる菌が分離され、従来認められている斑点細菌病に加えて他の細菌の関与がうかがわれた。以上の結果から、摘葉後の葉柄の軟腐が、急激な萎ちよう、葉の日やけ、その後起こる枯死の原因であろうと考察した。また、カボチャ台に接木したキュウリで葉柄の軟腐が著しく少なくなる理由については明らかにし得ないが、この症状を回避するためにはカボチャを台木とした接木栽培が有効であろうと考えられた。

第1表 萎ちようおよび枯死株の発生と葉柄の軟腐

区 の 内 容		12 月 17 日 調 査				1 月 9 日 調 査			調査株数
接木の 有 無	その他の 処 理	草 勢	萎ちよう 株 数	被 害 の 程 度	株当たり葉 柄の軟腐数	枯死株数	萎ちよう 株 数	被 害 株 合 計	
自 根	無 処 理	中	10	+	5.4	5	9	14	20
	鎮 圧	やや弱	16	+	6.8	15	5	20	20
	MB消毒	中	5	±	0.8	1	11	12	20
接 木	無 処 理	強	0	—	0.4	0	2(1)	2(1)	20
	鎮 圧	強	1(1)	—	0.2	1(1)	1(1)	2(2)	20
	MB消毒	強	0	—	0.3	0	0	0	20

注) 鎮圧区は作畦後踏圧、MBはメチルプロマイド。()内の数字は被害株のうち自根が切断されていなかった株。